

伝統的な言語文化としての古典（古文）教育の新展開

——「いま・ここ・我が事」に引き寄せる学習指導——

井 上 次 夫

要旨

平成の終わりに告示された新学習指導要領における古典（古文）は、小学校・中学校・高等学校を通じて引き続き、我が国の伝統的な言語文化として位置付けられている。そして、そこでは「古典の世界に親しむこと」が古典教育における主な目的の一つとなっている。しかし、高等学校では、小学校・中学校で積み上げてきた古典教育の成果が往々にして受け継がれることがなく、その目的が必ずしも十分に達成されているとは言えない現状がある。そこで、今後、高等学校国語科における古典教育は、内容の読解活動を基盤にしながらも、古典を過去のどこかの他人事ではなく、我が身（いま・ここ・我が事）として捉える視点、および我が国の伝統的な言語文化の継承という視点から、生徒の主体的・対話的な言語活動を重視した学習指導がいつそう肝要となる。本稿では、そのような学習指導法の例として『伊勢物語』二三段の授業実践報告を分析するとともに新たな授業実践案を示し、これからの古典教育の在り方について論じた。

キーワード 学習指導要領、伝統的な言語文化、古典教育、『伊勢

物語』二三段、学習指導法

はじめに

平成二九年三月に小学校、中学校の新学習指導要領が告示され、続いて平成三〇年三月に高等学校の新学習指導要領が告示された。この新学習指導要領は、これから約一〇年間にわたって実施される。古典は、新学習指導要領においてどのように位置付けられ、今後、どのような古典教育が行われていくことになるのだろうか。

本稿では、まず、新学習指導要領における古典の位置付けについて確認する。次に、小学校・中学校・高等学校の古典指導の指導例などを通して言語活動の状況について示す。そして、特に、従来から高等学校の古典教育が抱えている問題点を取り上げ、その解決に向けての糸口を探る。その後、近年の『伊勢物語』二三段（筒井筒章段）を扱った注目すべき授業実践について分析を行い、これからの新たな古典の学習指導を切り拓くために鍵となる視点を明らかにする。そして、ここで見出された視点に基づき『伊勢物語』二三段を教材とする古典授業の新しい授業案を示す。最後に、これからの古典教育の在り方について述べる。

一 新学習指導要領における古典

古典は、新学習指導要領においても、現行学習指導要領と同様に、小学校・中学校・高等学校を通じて「2内容」「知識及び技能」における「我が国の言語文化に関する事項」の中で引き続き「伝統的な言語文化」として位置付けられている¹⁾。

まず、小学校における古典指導について、そのア系列の指導事項からみると、次のように示されている。

第一・二学年

昔話や神話・伝承などの読み聞かせを聞くなどして、我が国の伝統的な言語文化に親しむこと。

第三・四学年

易しい文語調の短歌や俳句を音読したり暗唱したりするなどして、言葉の響きやリズムに親しむこと。

第五・六学年

親しみやすい古文や漢文、近代以降の文語調の文章を音読するなどして、言葉の響きやリズムに親しむこと。

すなわち、小学校では、学年の進行に従って学習対象の幅を広げながら、「聞く」ことや「音読・暗唱」などを通して言葉の響きやリズムに親しむ。そのようにして「伝統的な言語文化に親しむ」ことができるように指導するのである。

次に、中学校における古典指導について同様にア系列の指導事項をみると、次のように示されている。

第一学年

音読に必要な文語のきまりや訓読の仕方を知り、古文や漢文を音読し、古典特有のリズムを通して、古典の世界に親しむこと。

第二学年

作品の特徴を生かして朗読するなどして、古典の世界に親しむこと。

第三学年

歴史的背景などに注意して古典を読むことを通して、その世界に親しむこと。

すなわち、中学校では、学年の進行に従って、文語や古典作品、歴史的背景にも目を向けながら、「音読・朗読」などを通して「古典の世界に親しむこと」ができるように指導するのである。

また、「知識及び技能」における「我が国の言語文化に関する事項」の中にはもう一つ、イ系列の指導事項がある。そこでは、小学校・中学校ともに学年の進行に従って、長く使われてきたことわざや慣用句、故事成語、また、近代以降の文語調の文章や古典についての解説文、現代語訳や語注を手がかりに様々な種類の古典作品などを通して古典に表れた昔の人のものの見方や感じ方、考え方を知ることが指導すること、さらに、古典の一節を引用するなどして使うことを示している。すなわち、古典の言葉や文章に関する知識を得るとともに、古人の思想について知り、それらを自らの表現に活用を図ることができるように指導するのである。

さて、高等学校国語科の古典教育に関してみると、古典を主教材とするのは、今般、ともに新設された共通必修科目「言語文化」（標

準二単位」と選択科目「古典探究」（標準四単位）の二科目である。

高等学校一年次で共通必修修する「言語文化」においては、中学校における指導事項を受けて、次に示すような指導事項（「知識及び技能」(2)エ―力は省略。）を掲げている。

ア 我が国の言語文化の特質や我が国の文化と外国の文化との関係について理解すること。

イ 古典の世界に親しむために、作品や文章の歴史的・文化的背景などを理解すること。

ウ 古典の世界に親しむために、古典を読むために必要な文語のきまりや訓読のきまり、古典特有の表現などについて理解すること。

ここで注目したいのは、古典教育の目的がイ及びウで「古典の世界に親しむため」であることを明言している点である。この目的は、現行学習指導要領における共通必修修科目「国語総合（標準四単位）」の「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」の中には示されていない。また、選択科目「古典B」（標準四単位）の目標「古典としての古文と漢文を読む能力を養うとともに（中略）古典についての理解や関心を深めることによって人生を豊かにする態度を育てる」とも異なっている。それは、むしろ選択科目「古典A」（標準二単位）の目標である「古典としての古文と漢文（中略）を読むことによって、我が国の伝統と文化に対する理解を深め、生涯にわたって古典に親しむ態度を育てる」に近いものである⁽²⁾。

では、「言語文化」の指導事項における目的の「古典の世界に親しむ」

とはどういうことか。どのように捉えればよいのだろうか。これについて『高等学校学習指導要領（平成三〇年告示）解説』（東洋館出版）以下、『解説』と記す。）は次のように説明している。

古典の世界に親しむとは、古典の世界に対する理解を深めながら、その世界を自らとかけ離れたものと感ずることなく、身近で好ましいものと感じて興味・関心を抱くことである。作品や文章に関する歴史的・文化的な情報などを単なる断片的な知識として理解するのではなく、作品や文章に対する影響を与えたものとして理解することを通して、古典の世界のもつ豊穡さや魅力に気付かせることが重要である。（二一八頁）

次に、選択科目「古典探究」についてみる。この科目は「言語文化」を受けて、古典を主体的に読み深めることを通して伝統と文化の基盤としての古典の重要性を理解し、自分と自分を取り巻く社会にとつての古典の意義や価値について探究する資質・能力の育成を重視する科目である（『解説』一九頁）。このため、「古典探究」においては、「言語文化」の指導事項を受けて、次のような指導事項（「知識及び技能」(2)）を掲げている。

ア 古典などを読むことを通して、我が国の文化の特質や、我が国の文化と中国など外国の文化との関係について理解を深めること。

イ 古典を読むために必要な文語のきまりや訓読のきまりについて理解を深めること。

ウ 時間の経過による言葉の変化や、古典が現代の言葉の成り立ちにもたらした影響について理解を深めること。

エ 先人のものの見方、感じ方、考え方に親しみ、自分のものの見方、感じ方、考え方を豊かにする読書の意義と効用について理解を深めること。

このア及びイの文末をみると、「言語文化」のア及びウの文末「理解すること」が「理解を深めること」へと変わっている。ただし、このイ及び「言語文化」のウの文中にある「古典を読むために必要な文語のきまり」について『解説』をみると、「文語文法のほか歴史的仮名遣いなども含まれる。古文特有のきまりに重点を置いて、仮名遣いや活用の違い、助詞や助動詞などの意味や用法、係り結びや敬語の用法などについて理解を深め、古文を読むことの学習に役立つ」（二五四頁）とあるように、幅広く、基本的な知識である。したがって、その指導に際しては、これまでややもするとそうなりがちであったように、個々の断片的な文法知識それ自体の習得を目的とするのであってはならない。つまり、「文語のきまり」は、「古典を読むために」必要となるものを厳選し、本文の読解や解釈の重要な場面で、適切に指導するものであることに留意しなければならない。

二 古典授業における言語活動の重視

現行学習指導要領において「言語活動」は、従前の学習指導要領の「内容の取り扱い」であったものから「内容(2)」へと格上げされた。これは新学習指導要領においても受け継がれており、改めて各学校の創意

工夫による授業改善が求められている。

いま、参考のため、手元の『言語活動の充実に関する指導事例集』⁽³⁾から小学校・中学校・高等学校における古典指導についての指導事例の一部を引用してみると、次の通りである。

小学校

・ 神話・伝承などの読み聞かせを聞いたり発表し合ったりする事例（第二学年対象、単元名「言い伝えられているお話を楽しもう」）。教材「でいだらぼっちのお話」「いなばのしろうさぎ」「やまたのおろち」「海さち山さち」他

中学校

・ 古典の一節を引用するなどして、古典に関する簡単な文章を書く事例（第三学年対象、単元名『小倉百人一首』の和歌を鑑賞して文章を書く）資料を引用して書く。教材「小倉百人一首」

高等学校

・ 古典（古文）を脚本に書き換える事例（国語総合、単元名「歴史物語に描かれた情景や人物の表現の仕方を捉えよう」。教材「大鏡」肝試し）

・ 古典の現代語訳を読み比べる事例（古典B、単元名「現代語訳を活用して源氏物語を味わおう」。教材「源氏物語の本文（葵巻）及び当該巻の現代語訳七種」）

小学校では、読み聞かせを聞くことから発表し合う活動へ進めている。中学校では、古典（和歌）を読むことから資料として引用して文

章を書く活動に重心を置いている。そして高等学校では、古典の内容を読み取ることから脚本（台詞など）でその内容を表現する活動へ、また、古典の内容を異なる現代語訳ながらも複数の比較により読解を深める活動へと展開している。いずれも古典の授業時間において、児童・生徒が主体的に取り組むことが期待できる言語活動の指導事例として参考になるものであると思われる。しかし、各校種における国語科教育の現状、または古典授業の実態から考えてみると、このような言語活動の創意工夫が最も活発に行われているのは小学校であり、次いで中学校の順で、高等学校は最も低調であると思われる。この点を踏まえると、大滝一登氏による次の見解が注目される。

今回の学習指導要領改訂の主たるターゲットは高等学校であるといわれている。これまで、全国学力・学習状況調査などを通じて改善が進められてきた義務教育の成果が、高等学校に受け継がれず、結果として、社会で生きていく力が十分育まれていないとの問題意識によるものである。⁽⁴⁾

実は、この見解にみられる指摘は、高等学校における古典としての古文の教育（以下、「古典教育」と記す。）にもそのまま通じる深刻な問題点である。つまり、小学校、中学校と育んで受け継いできた、古典の音読や朗読、暗唱、また歴史的背景などを通じて古典に親しむこと、そして古人のものの見方、感じ方、考え方に触れ、登場人物や作者の思いを想像することなどが高校古典教育の段階で途切れてしまうことが常態化していることを糾弾されていると受け止めることができるのであり、またそれが正鵠を射ていると思われるのである。このこ

とを果たして現場の国語科教員はどのように受けとめるだろうか。また、特に高校古典教育においては、今後、どのようにすれば義務教育で成果を収めているような言語活動を重視した古典の授業へと転換することができるのだろうか。

三 高校古典教育におけるジレンマ

一般に、高等学校国語科の教員はこれまで学習指導要領が改訂されても、往々にして他人事で、どこ吹く風とばかりに、従来自身が行ってきた、あるいは自身が高等学校または大学で受けた経験に基づく古典の授業を範とする、まさに「古典的」な指導法を続けてきた状況があるといってもあながち的外れではないだろう。特に、この傾向が強いと思われる高校古典教育における授業について、中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」（平成二八年二月）は、その課題を指摘し、高校生の古典学習における学習意欲の低さについて次のように述べている。

高等学校では、教材への依存度が高く、主体的な言語活動が軽視され、依然として講義調の伝達型授業に偏っている傾向があり、授業改善に取り組む必要がある。また、（中略）古典の学習について、日本人として大切にしてきた言語文化を積極的に享受して社会や自分との関わりの中でそれらを生かしていくという観点が弱く、学習意欲が高まらないことなどが課題として指摘されている。（一二七頁）

確かに、高校古典教育においては、学習指導要領が示す指導事項を達成するために教材を選択するというよりも、まず教科書教材が先にあってその教材の内容をどのように指導するかに重点を置く傾向がみられた。例えば、現行の「古典B」において、「古典を読んで、人間、社会、自然などに対する思想や感情を的確にとらえ、ものの見方、感じ方、考え方を豊かにすること」(学習指導要領、2内容・(1ウ)を指導するために使用教科書の中から「虚実皮膜の論」(『難波土産』)が適切だという理由でこれを選んで教材とするというのではない。むしろ、教科書の中に「虚実皮膜の論」が掲載されているという理由からこれを教材として扱い、その内容について指導してきたと思われるのである。言い換えれば、目標とする古典の学力を習得させるために教材を選定する(「教材で教える」)のではなく、「教科書教材ありき」から出発してその内容を習得させる(「教材を教える」)ことになっているのであったと言える。

また、古典の学習指導の実際はどうかと言えば、多くの場合、予習として生徒に教材の本文をノートに写させて古語調べ、現代語訳を宿題として課し、授業では本文の音読、指名して逐語的に現代語訳させながら古語確認、文法説明、時に背景説明、そして残った時間で教材の内容について説明したり考えたりさせる。いわゆる訓詁注釈(中国古典の文字や章句の意味を解釈する訓詁学の方法)による授業、または文法翻訳法(外国語教育における外国語の対訳による教授法)に基づく授業が行われて続けているのである。

このような学習指導法は、長所として、多くの人数の学習者を相手に短い時間で語彙や文法の力を付けることができ、対訳することで現

代語と古典語の違いが分かりやすく、正確な読解力が養成できる点を挙げることができる。一方、短所として、知識伝授、読解中心の精読であるため教員主導の授業となり、学習者である生徒は講義を聞いてノートを取り、教員から質問があればそれに答えるといった受動的で単調な学習に陥りやすい点が挙げられる。古典(古文)の学習の場合、古語調べとその暗記、古典文法の学習とその暗記、古文の現代語訳とその暗記などは現代の高校生にとっても相当の負担となり苦痛に感じられていることだろう。また、その授業形態は基本的に座学であるため、退屈しやすく、現代語訳が一通りノートに完成した時点で古典学習も終わってしまいがちである。加えて、そもそも大学受験という目的以外に古典学習の目的や意義がなかなか見出せず、実感もできないといった問題点も挙げることができる。

このような旧態依然とした古典教育の状況の中で、高校生の多くが古典学習への意欲を持てないまま古典の授業を何とかやり過ごしていると言えは言い過ぎだろうか。実は、この高校古典教育が直面している高校生の古典学習に対する意欲の低下、古典嫌い、古典離れといった苦境は、昨今の新しい問題ではなく、従前から繰り返し指摘されてきた古くて新しい問題である。この問題に対し、古典教育に心を寄せる意欲的な教員は、新学習指導要領を俟つまでもなく、その状況を改善すべくこれまで様々な学習指導法を実践し、教材研究、授業展開の工夫や試みなどを積み重ねてきている。そして、高等学校でなぜ古典を学ぶのか、どうすれば高校生を意欲的で効果的な古典学習に向かわせることができるのか。そういった問いを胸に古典の授業改善に臨みながらも、限られた授業時間数、大学入試への対応、専門研究に基づく教材研究を十分に行う心身の余裕のなさの中でのため息をつき、また、

高校生の必ずしも芳しいとは言えない学習状況や学習意欲の低下といった現実の壁の前に立ちすくむ状況が続いているのである。そこには、国語科教員ならば誰しもが求めるような授業、例えば、生徒が生き生きと学び、興味・関心を深め、国語の力を身に付けて向上させていくといった古典の授業像とは別の、いま直面している日々の淡々とこなしていく苦痛すら味わいかねない古典授業の実態とのジレンマが存在しているのではないかと思われる。

四 新しい古典教育を切り拓く言語活動

ここまでみてきたように、今般、告示された小学校、中学校、高等学校の新学習指導要領は、古典を引き続き、我が国の伝統的な言語文化として位置付けている。そして、「古典の世界に親しむこと」を主な目的の一つとしている。また、そのことを達成するための学習指導上の手立てとして、音読・朗読・暗唱を重視するとともに、古典を読むために必要な文語のきまり、古典作品、歴史的・文化的背景などについて理解できるように指導することが求められている。

しかし、高校古典教育においては、小学校・中学校の場合とは異なり、これまで教員主導による訓詁注釈的な読解、古語や文法知識の暗記を中心とする学習指導、それが一因と思われる古典学習への意欲の低下、さらに古典嫌い、古典離れなどの弊害が悪循環しながらこれまで脈々と受け継がれ、その苦境から生徒も教員も容易には脱却できない状況が続いていることを指摘した。

そのような中で、これからの新しい古典教育を切り拓くためには、まずは「古典の世界に親しむこと」を達成するとともに、「我が国の

文化と（中略）外国の文化との関係について理解すること」の達成が求められる。その方策の一つとして、古典教育の先達がこれまで培ってきた国語科の質の高い教材研究と優れた授業実践の掘り起こしがあり、それが重要な一つの鍵となるのではないかと考える。同時に、新学習指導要領が唱える「主体的・対話的で深い学び」の視点から、改めて小学校・中学校、高等学校を通じて言語活動の工夫や優れた授業実践例を掘り起こして共有すること、また、特に高校古典教育においては国語科教員が依然として根強く持っている教員主導の学習指導観から脱却し、言葉による見方・考え方を生かした言語活動を通して生徒が主体的・対話的に学ぶ学習者中心の指導観へ変革すること、そして目の前の生徒の学習実態や意欲などを踏まえた新しい視点による教材研究、それに基づく学習指導法の開発とその試みが問題解決の成否を握っていると思われる。

そこで、高等学校国語科（以下、高校国語と記す。）の現行「国語総合」における古典（古文）における安定教材の一つである『伊勢物語』二三段を例として取り上げ、具体的な学習指導法のいくつかについて検討していきたい。『伊勢物語』二三段とは、いわゆる筒井筒章段（以下、「筒井筒」と記す。）である。この物語は、幼なじみの男女による初恋とその成就から始まる（第一段落）。しかし、その後、妻の親の死に起因する経済生活の困窮が夫婦関係の危機を招く。それに対する夫と妻、それぞれの思いと行動が描かれ、夫の身を案じる妻の独詠でクライマックスを迎える（第二段落）。最後に、男と高安の女との後日談が語られる（第三段落）。学習者である現代の高校生は、「筒井筒」の授業を通して、これまで何をどのように学んできたか。一方、指導者である高等学校国語科の教員（以下、教師と記す。）は「筒井筒」

を通して、何をどのように指導してきたか。

以下、そのような問いを念頭に、「筒井筒」の授業改善に向けて行われてきた近年の注目される学習指導の実践例をいくつか分析し、それらに共通する視点を見出す。その後、そうして見出された視点に基づき、「主体的・対話的で深い学び」に到達することができると考えられる言語活動を組み込んだ授業実践を提案する。すなわち、新学習指導要領に基づく高校国語における新たな古典授業の実施に向けた学習指導の具体的な実践例を示す。最後に、これからの展開が期待される古典の学習指導法の在り方について述べる。

五 現在の我が身に引き寄せて理解し表現する

ここでは、近年の「筒井筒」を扱った授業実践及び提案授業のうち、これからの高校古典教育を切り拓くうえで注目される三タイプの学習指導法を取り上げて分析し、共通する視点を見出す。

第一は、「筒井筒」の登場人物に学習者が同化して文章を書く活動を取り入れた学習指導法である。学習者である思春期の高校一年生は、物語の冒頭に登場する幼なじみの男女の初恋に感情移入し、その恋の成就を「いま・ここ」の「我が事」として捉えて喜び、幸せな気分を味わう。そして、その後、女側の親の死に起因する経済的困窮によって夫婦関係の危機が二人に訪れた際には、高校一年生にとっては未知の世界ながらも想像力を豊かに働かせて、夫、または妻に同化して物語を読み進めていく。そこで、その読解過程に焦点を当てた授業を組み立て、文章を書く表現指導に結び付けることができる。例えば、山岡万里子氏は、「物語の登場人物の立場に立って書き、書いたものを

交流することによって、本文をもとに想像力を働かせてイメージ豊かに古典を読む姿勢を養うとともに、古典を学ぶ意義を実践させたい」という思いから、現代の高校生が、「筒井筒」に登場する男、女、高安の女の三者、いずれかの立場に立ち、物語の回想文を自身の言葉で書くという授業を実践し成果を挙げている。⁶この「書くこと」の活動を取り入れた指導法においては、本文の読解活動がそれ自体にとどまるのではなく、表現活動へと連動して展開していく。学習者、そして読者である高校一年生は、古典の登場人物に自らを仮託することによって自身の読解内容を自身の言葉で表現し、物語の内容理解を深めたことでその古典学習に達成感を覚えていたのである。

第二は、「筒井筒」に関する絵画資料を活用した読解指導法である。古典の物語の内容を古文という文章ではなく、視覚資料の絵画を使用することにより現代の高校生に内容を理解しやすくする（理解補助）、内容について確認する（内容確認）、そして内容の理解を深化させる（内容比較・内容吟味）ことが可能となる。⁷

窪田裕樹氏は『伊勢物語』の初段「初冠」の例ではあるが、「春日の里」「陸奥のしのぶもぢずり」の二つの場面を描いた『小野家伊勢物語絵巻』の物語絵（場面を絵画化した挿絵）をまず読解させる。それと同時に、教材本文の内容について読解させる。そして、それら両者の読解を照合していくことを通して、両者における解釈の食い違いに気付かせる。そのような言語活動から、古典の多義的な読みの可能性を拓くことを目的とする古典の授業を提案している。⁸

一方、「三段「筒井筒」に関する絵画資料としては、通常、冒頭の「たけくらべ」の場面を描いたものが教科書に採録されているが（後述）、それとは別に、高安の女が手ずから食器に飯を盛りつける様子を男が



図1 透垣から垣間見する男

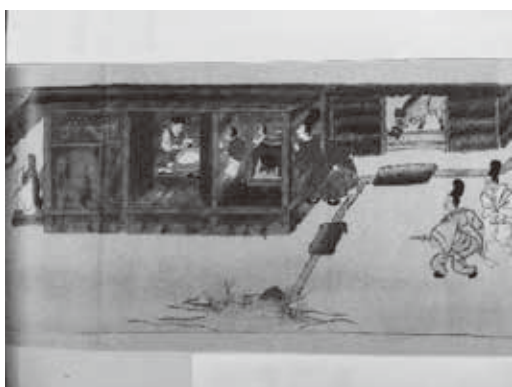


図2 縁先から覗き見する男

見る場面（第三段落）を描いたものも存在し、それを掲載する教科書もある。それらの絵画は、男が高安の女の家の外から室内の様子を垣間見する構図のもの（図1）が多いが、これ以外に、男が家の庭先または縁先に立ち入ってそこから室内の様子を覗き見るもの（図2）がある。さらに、男が高安の女の家の室内に座っており、その面前で女が飯を盛りつけるのを目撃しているもの（「伊勢物語扇面書画帖」）もある。そこで、それら複数の種類の絵画資料を用いた「内容比較」の言語活動を取り入れた授業を組み立てることができる。ただし、ここでは紙幅の関係でその詳細について触れる余裕がない。

いずれにせよ、このような絵画資料を用いた指導法では、古典と現代といった時代の壁、古語と現代語という言葉の壁を乗り越える絵画という手段によって古典の物語の内容が現代の高校生に分かりやすくなり、古典の物語に近づきやすくなる。また、そこでは、絵画が制作された時代の人々による当該場面の解釈、また、その当該場面の絵画

を描いた絵師による場面理解、それらと現代の高校生が行った場面理解とが対照され検証されていく。その中で、「筒井筒」の当該場面の理解は更新され深化していくことになる。

第三は、「筒井筒」の享受・受容史に着眼した学習指導法である。古典の授業で、古典の物語の本文を読んで内容を読解し、理解することだけに終始するのではなく、その古典文学作品がこれまで先人によってどのように読み継がれてきたのか、その様相について知ることが、現代の高校生が我が国の伝統的な言語文化の担い手であることを自覚し、生涯にわたって古典に親しみ、尊重していく態度を養うことに結び付く契機となる。^⑩

このような視点から前掲の窪田裕樹氏は、「これ「物語絵」を教材として活用することで、古典文学作品がどのように読まれ、親しまれてきたのかという享受史的な授業が展開できるのではなからうか」と述べている。^⑪そして、教科書の多くに掲載されている「筒井筒」冒頭の「たけくらべ」の場面の挿絵に着目し、その多くが嵯峨本『伊勢物語』（国会図書館蔵、一六〇八年）の「水鏡（幼い男女が水面に姿を映して見る仕草）」の構図であることから、物語絵を用いた授業を提案し、実践している。ここでも窪田氏は、まず教科書に掲載された挿絵の内容を読み取らせるとともに、それと本文の内容を比べさせて異同や関係性について考えさせている。そして、中古の『伊勢物語』『筒井筒』が中世の世阿弥の能「井筒」に影響を与えていること、さらにその解釈を受けた絵師が「水鏡」の構図の絵を描いたこと、それが現代の私たちが使用する教科書へと受け継がれていることに気付かせようとする。そこでは、古典を後の時代の人々が、それぞれの時代に、それぞれの解釈を加えながら創造し、継承する中で、それまでの古典が「新

しい古典」として更新されながら現代に至っていることを知るとともに、先人から継承してきた我が国の伝統的な言語文化の流れの中に、自分たち高校生が現代の担い手として確かに位置しているという実感がもたらされることになると言えるのである。

以上、ここまでみてきた三タイプの学習指導法は、一見、時代や言葉の違いなどが壁となつて現代からは遠くに思われがちな古典の世界について、それを現在の我が身（いま・ここ・我が事）に引き寄せて理解させ、それを表現させようとしている点で共通している。小学校・中学校を通じて古典の世界に親しんできた児童・生徒が、これまでそうであつたように、高等学校での古典学習は難しいもの、現在の我が身とは無関係、または現代には無用のものとして遠ざけてしまう結果をもたらすような学習指導、古典の授業であつてはならない。新学習指導要領が告示され、これから約一〇年間にわたつて実施されていく今こそ、教師は、これからの時代に適応した古典の授業改善に向けて古典における学習指導観を大きく転換しなければならない。そして、言語活動を重視した学習指導における新たな工夫と効果的な授業実践を支えるような教材研究を真剣に進める必要がある^②。

六 古典を主体的・対話的に読み比べて批評する

前章では、これからの高校古典教育の活路を見出すべく、「筒井筒」を扱った三タイプの授業を分析した。すなわち、「筒井筒」の読解活動を一応は通過儀礼としながらも、それを到達点とせず、主体的な表現活動へと展開させる授業である。また、現代の高校生にとって古典を近づきやすくする絵画資料を用いて絵画の読解と本文の読解とを比

較・対照させる授業である。そして、古典の享受・受容史の観点から古典作品を現代の高校生へとつなぐ工夫を組み込んだ授業である。それらを通して、これからの学習指導法に必要な視点を析出した。

本章では、主体的・対話的に古典の和歌を読み比べて批評する言語活動を通して深い学びを達成することを目的とする高校古典教育の授業実践例を提示する。そこでは、古典文学作品『伊勢物語』を歌物語という観点から捉え、二三段「筒井筒」で詠まれた五首の和歌に着目している。そして、学習者が主体的に歌を評価し、それを他者との対話的な言語活動を通して深い学びを達成することを目標とする。以下、実際の授業の展開に即して述べていく。

まず、「筒井筒」においては、次に示すように、大和の男の歌一首、大和の女の歌二首、高安の女の歌二首の計五首が詠まれていることに教師自身が着目することから授業は構想される。

- | | |
|---|---|
| A | 筒井筒井筒にかけしまろがたけ
過ぎにけらしな妹見ざるまに
(大和の男) |
| B | くらべこし振り分け髪も肩すぎぬ
君ならずしてたれかあぐべき
(大和の女) |
| C | 風吹けば沖つ白波たつた山
夜半にや君がひとり越ゆらむ
(大和の女) |
| D | 君があたり見つつを居らむ生駒山
雲な隠しそ雨は降るとも
(高安の女) |
| E | 君来むといひし夜ごとに過ぎぬれば
頼まぬものの恋ひつつぞ経る
(高安の女) |

実際の学習指導に際しては、まず単元の指導計画の最初の時間に、教材「筒井筒」の読解学習の後、「筒井筒」に登場した和歌のランキング審査会を開催する旨を予告する。その審査会では学習者一人ひとりが審査員となり、教師が審査委員長となつて五首の和歌の優劣を判定し、順位付けを行うことを説明する。そして、「審査員の名にふさわしい力量（鑑識眼）を授業で身に付けて役割を果たそう」という具体的な目標を提示し、以後の「筒井筒」の学習及び和歌五首の学習を動機付ける。

さて、実際、この和歌ランキング審査会はどのように行われ、ランキングの結果はどうであつたか。ここでは、筆者の所属大学における国語教職課程の科目で行った模擬授業（二〇一九年五月実施。対象：大学四回生六人、時間：五〇分間）を紹介する。

最初に、高校一年生役として大学生は、配布プリントの「和歌ランキング表」に個人の判断による順位（一位～五位）を理由とともに記入する。次に、二班に分かれて協議を行い、学習班としての順位付けを行うとともに、その理由を協議して整理する。そして、その結果を全体協議の場で班の代表者が発表し、質疑応答を行う。その後、配布プリントの所定欄に全体協議を踏まえて、改めて個人による最終的な和歌ランキングを決定し、その理由を記入する。最後に、本時の「振り返り」をプリントの所定欄に記入して提出する。

和歌ランキングの結果は、最初の個人段階では小さなばらつきが見られた¹³。しかし、班協議を経た後は、一位がC歌（「風吹けば」）で全員が一致した。また、二位と三位は、A歌（「筒井筒」）とB歌（「くらべこし」）に分かれた。四位はD歌（「君があたり」）、五位はE歌（「君来むと」）で一致した。順位付けの理由をみると、例えば、「一途な思

い（A・B歌）」「夫を心配する気持ち（C歌）」「恋の切なさ（D歌）」「未練がましき（E歌）」が読み取れるなどと詠手の心情を挙げたものや「句切れ」「倒置」「掛詞」「序詞」「擬人化」などの修辞法（表現法）の使用と効果を挙げたもの、さらに、当該歌が詠んだ相手の心を射止めたか、相手を引き止めたかといった歌の力、機能（歌徳）を挙げたものにまで及んだ。次に、授業の「振り返り」の記述をみると、「本文の内容や歌の技法を振り返る契機となった」「歌の評価について自分とは異なる着眼点や審査基準に触れていて視野が広がった」「詠まれた歌を自分で審査するという活動は新鮮で楽しい活動だった」などがあった。こうして、模擬授業を受けた生徒役としての大学生は「審査」という言語活動を通して、「筒井筒」の本文と五首の歌について意味内容、表現形式、修辞法、歌の詠手の思い、歌が担った機能などの観点から学習を振り返った。そして、自身が立てた審査基準の幅を協議の中で広げたり変更したりしながら古典文学に親しみ、「筒井筒」の理解を深め、定着させることができたものと思われる。今後、高等学校の現場において、実際に高校一年生を対象にしたこのような授業の実践報告が期待されるところである。

さて、審査委員長を務めている教師は、各学習班で提出された審査結果を総括する役割を担う。しかし、必ずしも和歌ランキング（順位付け）の正解として一つを示す必要はない。また、各班が提出したランキングの中から正解としてあえて一つに絞り込む必要もない。すなわち、たとえ二位と三位がA歌とB歌とに分かれたとしても、それはむしろ歓迎すべき結果であり、そこに至るまでの班での協議や理由の発表を重視して評言を与えることのほうが学習指導としては重要である¹⁴と考える。このため、この模擬授業では審査委員長として、提出さ

れたランキング結果については質的評価としての評言を与えることはあったが、最終的な和歌ランキングは各審査員（学習者）に一任することにして、個人による最終ランキングとその理由、本時での学びを配布プリントに記入後、提出させることとした。

なお、教師役は、審査委員長としての立場から審査会の最後に設けた講評の中で、次のような情報を提供した。

まず、古典の享受・受容史の観点から、C歌（「風吹けば」）が『古今和歌集』（巻第一八雑歌下）九九四番歌にあること、藤原公任の歌論書『新撰髓脳』がC歌を「歌の本にすべしといひけるなり」と記していること、D歌（「君があたり」）が『万葉集』巻十二の三〇三二番歌を原歌とすることに加えて『新古今和歌集』（巻十五、恋歌五、一三六九番歌）に採録されていること、さらに、E歌（「君来むと」）もまた『新古今和歌集』（巻十五、恋歌三、一二〇七番歌）に採録されていることなどを紹介した。

また、歌物語の成立という観点から、AとDの歌は大和地方の民謡的な古歌・伝承歌が「筒井筒」に取り込まれ物語中の人物の歌に利用された独立歌謡と考えられること、E歌は「筒井筒」第三段落の書き手が高安の女の歌として作った物語歌である可能性があることなどの補足説明を行ったのである。

今後、新学習指導要領の下で、このような複数の歌や絵、または段落、教材、作品などを読み比べ、批評する古典の授業がいつそう増加していくことが予測される。しかし、「読み比べ」自体は、高校国語で既に、例えば、夏目漱石『こころ』と武者小路実篤『友情』、芥川龍之介『羅生門』と『今昔物語集』、『羅城門登上層見死人盗人語第十八』、中島敦『山月記』と李景亮『人虎伝』、『伊勢物語』二三段と二四段などでも行わ

れてきたものである。そこで、それらの成果を踏まえて「筒井筒」においてもいつそう積極的に「読み比べ」を取り入れたい。例えば、高校生が古典文学賞の審査員になり、学習班単位で「筒井筒」という物語の内容や形式、構成、執筆意図などについて批評したり討論したりする活動（「言語文化」 B読むこと(2)イ）、あるいは高校生が「筒井筒」の書き手になったとして、班単位で『古今和歌集』九九四番歌の作歌事情を物語る左注、並びに『大和物語』一四九段を教材としてその構成や内容、表現、描写などを読み比べて論述したり発表したりする活動（「古典探究」 A読むこと(2)イ）を取り入れた授業を構想することができるだろう。後者については、高校一年生の「言語文化」の授業で学んだ「筒井筒」を、二年生または三年生になってから選択科目「古典探究」の授業において、新たな視点から改めて学び直すといった、いわば「学年またぎ」の古典学習の一例とすることができる。

おわりに

本稿では、平成の終わりに告示された新学習指導要領が令和二年度以降、小学校から順次、中学校、そして高等学校で実施されていくにあたり、引き続き伝統的な言語文化として位置付けられている古典の学習指導の新たな展開に関して現状と展望を述べてきた。

すなわち、近年の「筒井筒」の授業改善に向けて注目される学習指導法を取り上げ、それらが物語の回想文、絵画資料、享受・受容史を活用するなど古典の世界を現在の我が身（いま・ここ・我が事）に引き寄せて理解したり、自身の言葉で表現したりするものであることを指摘した。そして、今後、特に一つの教材について複数の立場から互

いに読み比べたり、複数の歌や絵、教材、作品を読み比べて批評したり、論述したりする言語活動がこれからの新たな古典の授業を切り拓く重要な契機の一つになることを述べた。

ただし、そこでの学習指導法は、けっして奇をてらったり特別な教材研究や教材開発を行ったりしたものではなく、実は、国語科教育の先達によりこれまで積み重ねられてきた学習指導上の工夫や優れた実践の中に見出すことができるものである。また、それは国語学、古典文学の専門研究を背景とする質の高い教材研究に基づく工夫や実践の中から生み出されてくるものである。そうしたことを基盤とする学習指導法は、教師の優れた授業の構築力、展開力、評価力などと相俟って、我が国の伝統的な言語文化としての古典の教育に名実ともに新たな花を開かせる原動力になる。

注

- (1) 文部科学省『高等学校学習指導要領（平成三〇年告示）解説』国語編の付録「教科の目標、各科目の目標及び内容の系統表（高等学校国語科）」（東洋館出版社、平成三〇年）。
- (2) 「古典A」は言語文化の理解を中心的なねらいとし、「古典B」は読む能力を育成することを中心的なねらいとしている。現行高等学校学習指導要領『解説』一四頁。
- (3) 文部科学省『言語活動の充実に関する指導事例集』思考力、判断力、表現力の育成に向けて〜『小学校版』（教育出版、平成二三年）。【中学校版】（同、平成二四年）、【高等学校版】（同、平成二六年）。

(4) 大滝一登『高校国語新学習指導要領をふまえた授業づくり理論編』（明治書院、平成三〇年）。一八頁。

(5) 「言語文化」及び「古典探究」の指導事項（知識及び技能）(2)ア。

(6) 山岡万里子「イメージ豊かに古典を読む―『伊勢物語』『筒井筒』（高校一年）における言語活動―」（『愛媛国文と教育』（四七、二〇一五年）。

(7) 井上次夫「国語教材における図版類の活用―理解補助から読解指導へ―」（『高知県立大学紀要文化学部編』六六、二〇一七年）。

(8) 窪田裕樹「挿絵を活用した『伊勢物語』初段の読解指導」（『横浜国大言語研究』三四、二〇一六年）。

(9) 図1・図2は、羽衣国際大学日本文化研究所編『伊勢物語絵巻絵本大成 研究篇』角川学芸出版、二〇〇七年）に拠る。本書収載の絵巻絵本で、この場面が描かれている七種のうち一六世紀以降成立の四種は男が敷地外から垣間見する構図である。一方、室町時代後期書写の『中尾家本伊勢物語絵本』（個人蔵）、室町時代後半から江戸時代初期制作の『小野家本伊勢物語絵巻』（個人蔵）、そして成立は江戸時代後期であるが、鎌倉末期ないし南北朝時代の絵巻の姿を伝えられる模本『異本伊勢物語絵巻』（東京国立博物館蔵）の三種は男が敷地内にいて縁先から女の振る舞いを覗き見る構図である。

(10) 有馬義貴「古典の享受・受容から学ぶ文化と伝統―『伊勢物語』を例として―」（『全国大学国語教育学会発表要旨集』（二一九、二〇一〇年）。

(11) 窪田裕樹「物語絵から読む『伊勢物語』―教材としての可能性―」（『教育デザイン研究』七、二〇一六年）。

(12) 井上次夫『『伊勢物語』二十三段の教材研究(一)——本文の注釈と論点の分析——』(『高知県立大学紀要 文化学部編』六九、二〇二〇年) 参照。

(13) 例えば、一位の中にA歌を挙げるものがあつた。理由は、教科書の教材名が「筒井筒」であることからこれを代表歌と考えたという。しかし、この場合、『伊勢物語』の書き手が「筒井筒」という題名を付けたのではない。古典教材の本文の題名は、通常、古典作品の著作者が付けたとは限らず、教科書会社が便宜上、教材本文の冒頭部分を教材名として付けるような場合もあるため、古典教材の指導に際しては留意したい。

(14) 学習者が高校一年生で、歌の力、歌が担う機能(歌徳)について挙がってこない場合、教師が補足説明を行う。

(いのうえ・つぎお 本学教授)

New Developments in Classics Education (classical texts) as Traditional Linguistic Culture:

New developments assisting students in linking classical texts
with their personal “here and now”

Tsugio INOUE

abstract

In the new educational guidelines, classical texts are to be taught continuously throughout elementary, junior high, and high school and treated as Japanese traditional linguistic culture. Thus, “familiarizing oneself with the classical world” is a common goal of classics education. Currently, however, the foundations in classics education built during elementary and junior high school are rarely retained into high school, so students are not always able to reach this goal. Henceforth, for classics education in high school Japanese language arts courses, it is vital to provide lessons that—while maintaining a basis in reading comprehension—emphasize students’ active and interactive linguistic activity by ensuring that students understand the classics as connected rather than disconnected from their own lives and including the perspective of passing on Japan’s traditional linguistic culture. Therefore, this study considers the vision and direction for classics education moving forward using Episode 23 of *The Tales of Ise* as an example for this kind of educational method.

Keywords: Educational guidelines, traditional linguistic culture, classics education, Episode 23 of *The Tales of Ise*, teaching method